

# フンボルト大学

短期在外研究の機会をいただき、フンボルト大学のゲストハウスに間借りして、現代劇の勉強のために二〇〇五年四月から九月まで五ヶ月余りの時間をベルリンで過ごした。一九九九年に客員研究員として明治大学に在籍したフンボルト大学第三哲学部のベアーテ・ヴェーバーさんのお世話になった。シッフパウアーダム劇場（ベルリーナー・アンサンブル）、ドイツ劇場、ゴリキー劇場、国立オペラ劇場などへ徒歩数分で行ける至便な地にあるゲストハウスを借りられることができたことはありがたかった。ヴェーバーさんは日本学、とりわけ日本の近代劇を専門とする研究者だが、現在はフンボルト大学付属森鷗外記念館の副館長も勤めておられる。ドイツ現代劇にも造詣は深く、たとえば昨年も来日したベルリーナー・アンサンブルを日本

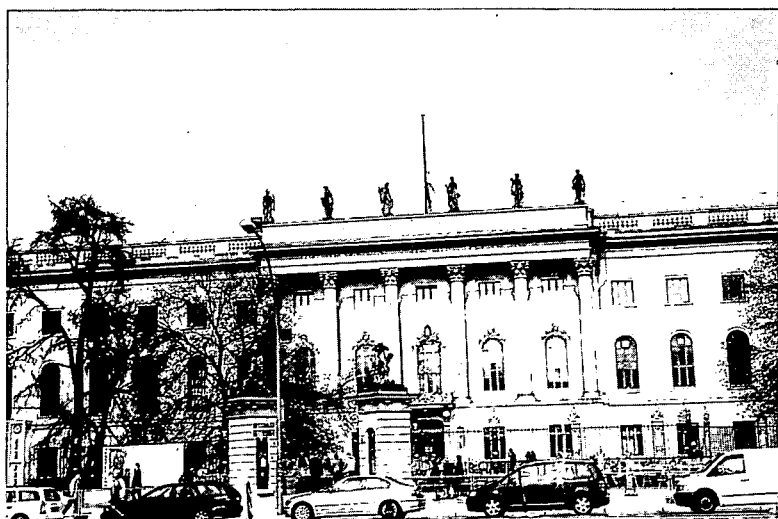
に紹介する仕事などにはずっと以前から関わってきた方だ。

野 島 健 児

森鷗外記念館もゲストハウスに近かったので彼女からホットな演劇情報を得るためにしばしば邪魔した。森鷗外記念館は鷗外がドイツに到着した百年後という一九八四年にもともの鷗外の下宿を改修・整備してオープンした。財政的には危機の連続で毎年のように今後の存続が危ぶまれていた。記念館は特別展示を除いて毎年約四千人の見学者があるが、鷗外の部屋を再現して見せているだけではなく、日本の学術文化の研究や日独間文化交流の仲介や紹介も任務としており、その役割は重要である。したがって日本からの財政的支援が恒常的になされてしかるべきだと思うのだが、そうなのではない。残念な実情にある。

さてフンボルト大学だが、大学中央校舎はベルリンのシンボルであるブランデンブルク門から約一、四キロ続くウンター・デン・リンデン通りに面している。もとは時の皇太子ハインリヒの離宮として建てられたもので、プロイセン王国の権威の象徴でもあった建築物だ。二〇〇五年その建物正面には、かつてベルリン大学で教鞭をとったアインシュタインの言葉が大きく赤い字で掲げてあった。特殊相対性理論を発表してから百年という節目の年であったからだ。「わたしには特別な才能はなかった。ただ熱き好奇心があっただけです」。大学正門付近は常に古本市が立っている。なかなかいい雰囲気だ。リバティー・タワーの前に古本屋が出張っけていてもいいなと思った。

通りをはさんでペーベル広場があり、そこに法学部校舎が立つ。この広場こそナチスを支持する学生らによる焚書のあった現場だ。一九三三年五月一〇日ここで二万冊の本が焼かれた。今は広場の中ほどに書庫が記念としてしつらえられている。地下にあるので気をつけていないと見過ごしてしまうが、ガラス越しに一冊も収められていないが二万冊収納できる書棚を見ることが出来る。「わたしを燃やせ！わたしが真実を書



ウンター・デン・リンデン通りのベルリン・フンボルト大学中央校舎（正面）

かないことがあったか？ わたしを忘れないでくれ！  
わたしを嘘つきにしないでくれ。わたしを燃やせ！」  
というブレヒトの詩を思い出しながら、夜の闇に照らし出される空虚な地下書庫を見ていると感慨が深い。

ペーベル広場に沿って国立オペラ劇場がある。周辺には国立図書館、歴史博物館、世界遺産の博物館島、ベルリン大聖堂などすべて徒歩数分の距離にある。シユプレー川遊覧船乗り場も近い。フンボルト大学は明治大学以上に都心型の大学なのである。

法学部、農業園芸学部、第一理工学部、第二理工学部、医学部、第一から第四までの哲学部、神学部、経済学部、十一学部ある。ドイツには約九千の専攻があるといわれているが、うち二二四専攻を擁している。教授ポストは四三九（うち女性教授は現在五七）であるがこの数字には客員教授、ジュニア教授二一、その他研究所教授なども含まれている。近年ベルリンは財政難を理由にして大学の予算はカットの一端、教授定員数の削減も加速している。客員やジュニアなどを除く実質の教授ポスト数は九五年当時三七三であったが〇三年には三〇五に減ったということである。もともとドイツの大学は教授定員数が少ないことで有名であ



ベルリン大学付設 森鷗外記念館（全景）

るが、その傾向は今後変わらないようだ。ただし教職員の総数は慈善病院（シャリテ）を除いても二六三名と多い。

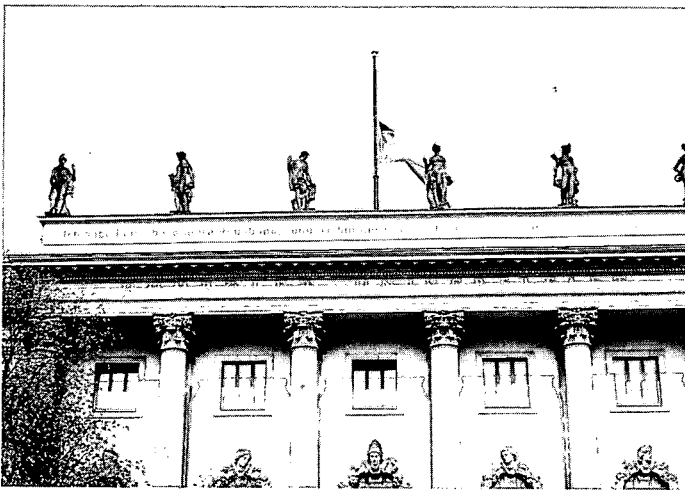
二〇〇五年の夏学期は三八六九〇名の学生が在籍していた。ただしこの数字にはベルリン自由大学医学部の学生も含まれる。東西ドイツ統一後フンボルト大学とベルリン自由大学（学生数は約四万）とはシャリテなど医学関連施設を共有し、医学部を共同運営するかたちをとっているからである。学生のうち男子は四一、六％で女子学生の方が多い。留学生が一四、七％。全国平均は一二、六％だ。だから留学生の比率は平均より高い。統一後のベルリンは新生ドイツの政治・経済・文化の中心として躍進している。現代アートやフアッションの最前線として世界をリードしていることは旧東ベルリン地区の再開発現場に触れるだけで実感できる。この事情が留学生をここに引き寄せているように思われる。その一方で取り残されたように朽ちた建物が散見されるのももうひとつの現実である。ところがそのような朽ちかけたビルを最先端のアーチストが根城にして、斬新な作品の発信基地にしていたりするとところが現在のベルリンのおもしろいところ

ろかもしれない。

ブラハ一三四八年、ウィーン一三六五年、ハイデルベルク一三八六年、ケルン一三八八年、ブラハを数えることには今となつては抵抗があるが、ドイツ語圏の大学を創立順に並べるとこうなる。一九六〇年以降に創設された真新しい大学も二〇以上あるけれども、ベルリンのフンボルト大学創設は一八一〇年で比較的最近のことである。もともとはベルリン大学として誕生し、一八二八年から一九四六年までは設立者のプロイセン王フリードリヒ・ウィルヘルム三世の名を冠し、フリードリヒ・ウィルヘルム大学と呼ばれていた。この大学の設立構想に強い影響を与えたウィルヘルム・フォン・フンボルトとアレクサンダー・フォン・フンボルトにちなんでフンボルト大学と称するのは一九四九年東ドイツ時代のこと。ドイツ社会主義統一党の提唱による。フンボルトの構想をかんたんに言えば「大学とは自由に知性を修練する場である」ということになるが、言い換えると国家の介入をできるだけ制限すること、教育と研究の自由を体現する大学を構想したということである。その後この理念は世界の大学設立構想のモデルとなっていく。鷗外が留学したころは

ずいぶん改善されていたのだが、それでも「独逸日記」にはドイツの学生が飲酒、決闘などにうつつを抜かして恥じるところがないことが記されているが、それほど一九世紀初頭ドイツの大学は沈滞していた。そうした事情にナポレオンに支配された屈辱をばねにするという契機があつて、ドイツ、とくにプロイセンが国民国家として近代化を図るわけだが、その任務の重要な一角を、新しい理念に基くフンボルト大学も担い、当時の教育研究を先導したわけである。そのような背景もあつてフンボルト大学が近代の大学設立のモデルとなつていったものであらう。

こうした経緯もあつてか、フンボルト大学の歴史は国家や政治からの自由を標榜しつつ、実はそのうねりに翻弄されてきた歴史である。大学名の変遷にもそれは端的にあらわれているし、戦後ソ連が大学に強く介入した際、これを忌避してベルリン大学からベルリン自由大学が分離・誕生した歴史もそれを象徴している。この伝統からか、現在も政治課題にもっとも敏感に反応する大学のひとつではあるようだ。ドイツでは小学校から大学まで学費はかからないのがふつうだが、最近では徴収をする州も出てきた。この問題に関し

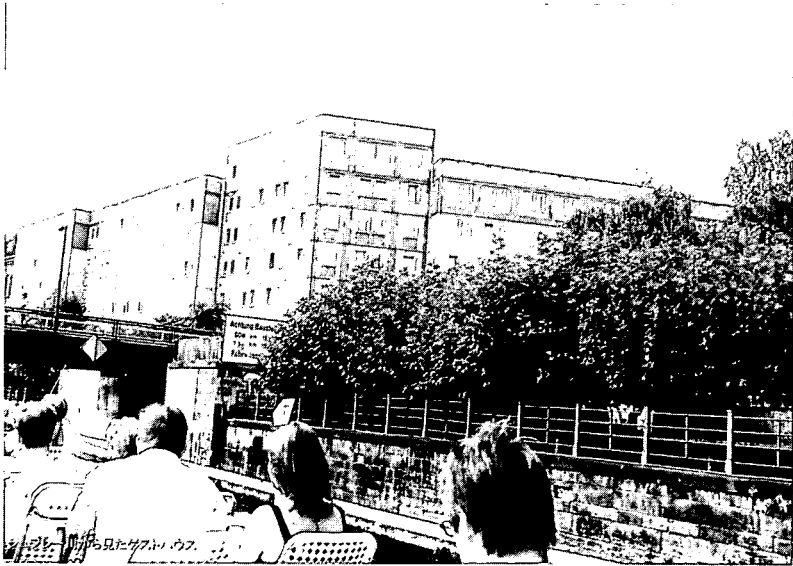


ベルリン・フンボルト大学中央校舎

金字の大学名の上にアインシュタインの言葉が赤い字で書かれている。  
「私には特別な才能はない。ただ熱き好奇心があるだけだ」

てドイツで反対の声を真っ先にあげストライキを敢行したのはフンボルト大学の学生であった。

政治的に敏感な学生の多いフンボルト大学なのだが、わたしが滞在したときには政治的な熱さを感じさせる場面を見ることはほとんどなく、大学近辺では、図書館やカフェで読書し、レポートを執筆している生徒や、メンザでにぎやかに語り合う学生を目にするばかりであった。世界は激しく動く、ドイツもベルリンも激しく変わる。その中であって青春を謳歌し、学究に邁進する学生を目にすることは決していやなことではない。むしろ好ましい風景であったが、ちよつと寂しいような感じもあった。それはロンドンでの地下鉄テロを予言するような若い演出家の芝居をはじめ、わりあいラジカルなテーマをもつ芝居をそのころわたしが見ていたからかもしれない。



ベルリン・フンボルト大学 ゲストハウスから見たシュブレー川